

八月一日、一ヶ月交替のわがPMSチームがパキスタン側にあるヤルクン河上流のラシュト診療所に赴いた。ところが、もともと険路の上、氷河の崩落で河がせき止められて上流が増水、診療所付近まで浸水したとの知らせがあった。ところがわが医療チームは指令に背き、恐れをなして逃げ帰ってしまった。

一方、この災害が起きたとき、ラシュトに滞在していたのはヌールアガ医師以下職員六名、交替のため下流のマスツジ村診療基地に戻ろうとしていたが、退路を断たれ、徒歩で山中の道を二日ばかりで帰った。その頃には、すれ違いに赴いた前述のチームも狼狽のあまり、事態を確認せぬままペシャワールに戻っていた。病院側は被災民の緊急救助隊を別の組織して、やつと三日後に送るありさまであった。

崩れ落ちてきた氷河は、ラシュト村から約四キロメートル下のインキープ村を襲った。大量の土砂流と氷河がヤルクン河の急流をふさぎ、突然ダムをなして上流の村々を浸水させた。これは昔から同地に移住する住民も経験したことのないもので、村々はパニック状態に陥った。

わがPMS診療所があるラシュト村の河沿いの家々も浸水し、診療所から四〇〇メートルのところまで水が迫った。驚いた住民は河から五〇〇メートル程離れた小高い丘に逃げ、約二百所帯が野宿生活を余儀なくされた。

チトラール駐屯軍の行動の方は速やかで、この翌日八月二日には、一個中隊約二五〇名が食糧とテントを持って下手のチトラールから駆けつけ、避難民の救済に当たった。もちろん中途の道路決壊地は徒歩で超えた。この時、連絡を受けたPMS病院・事務長、イクラム元少佐は、「避難民の逃げた数百メートル近くにわが診療所があります。医療問題は任せていただきたい」と当局に協力を申し伝えて、いたく感謝された。直ちにラシュトの留守チームに連絡をして被災者の救護に当たるよう指示したが、先に述べたように月末の交替時期で連絡が混乱した訳である。診療所はまる三日間空になり、肝心のときに救護活動のタイミングを失った。「道路が塞がって到着できない」というのが逃げ帰った交替チームの言い訳で



あったが、一五〇名の中隊が行けたのだから、通れないはずがない。これによって、わがPMS病院は面目まるつぶれとなった。私は交替に赴いたターヘル医師の臆病・無責任とみて、同医師の懲戒免職を行い、即時に別のチームを困難の末に派遣したわけである。

幸い負傷者はなく、数百名の避難キャンプの人々を通常に診るだけで済んだが、氷河の崩落そのものが前代未聞の珍事で、土地の長老たちにも恐怖心を与えたのである。

この天から降ってきた災害は、アフガニスタン側の大干ばつと無関係ではない。ヒンズークツシユ山脈全体に異変が起きていたのである。

年々上昇する雪線、アフガニスタンの旱魃、積雪量と河川の水量の激減、これらの事実は容易に結びつく。現地のことわざに、「アフガニスタンでは金が無くても生きられるが、雪がなくては生きてゆけない」という。それまで私は、これを文学的に解釈して、アフガン人の稔侍と郷愁を述べるものだとばかり思っていた。だが、生存そのものにかかわる重大な自然の事実を含んでいたのである。オアシス的な村落の多い乾燥地帯では、水源を夏に溶け出す氷雪に専ら依存している。世界の屋根、カラコルム・ヒンズークツシユ山脈は、周辺の広大な地域に安定した水を供給す巨大な貯水槽である。この貯水槽が枯渇しつつあるのだ。容易ならざる事態が進行していると思わずにはおれなかった。七月以来、ダラエヌールの大旱魃に驚き、必死の水源確保を始めたばかりのことである。



氷河の崩落で堆積した土砂

